

Imaging Arts



「なんとなく」からの解放、「表現」がはじまる

映画、写真、アニメーション、ミュージックビデオ…私たちの日々のなかにあふれている映像。それをただなんとなく受け取る立場から一歩踏み出すことで、映像の世界が開けてきます。一つ一つの構図や展開の意味、技法を読み取ることで、本当に面白いものを見出す力が身につきます。そして「自分の好きな世界」を人に伝えることが、表現のはじまりです。入試で問われる小論文や感覚テストは、その第一歩。観察と考察を自身の言葉で文章にすることや、自分の発想したイメージを伝える画面構成など、映像制作の基本となるコミュニケーションを学びます。これまでに映像をつくったことがない、絵を描いたことがない、という人も大丈夫。それよりも大切なことは、自分の好きなこと、興味の持てることに向かっていく姿勢です。好きなものをさらに掘り下げて、もっと好きになることが映像をつくる力になります。映像表現が持つ多様性を楽しみながら、自分の世界を照らし出しましょう。

高2・3卒生 映像専攻 対象 どちらのコースも、学年や描画経験の有無にかかわらずどなたでも受講できます。多くの学生が未経験から入塾、映像系学科の入学試験で必要とされる実技力を授業のなかで身につけています。

土曜・日曜専科 [土] 15:00-19:30
[日] 9:30-18:00

週2日に集中したスケジュールで、構想～制作～再考にじっくり取り組める基本コースです。

日曜専科 [日] 9:30-18:00

遠方からの通塾、高校の授業、部活動やその他の理由で、日曜日だけしか通えない方のためのコースです。学期の途中で土曜・日曜専科に変更することができます。



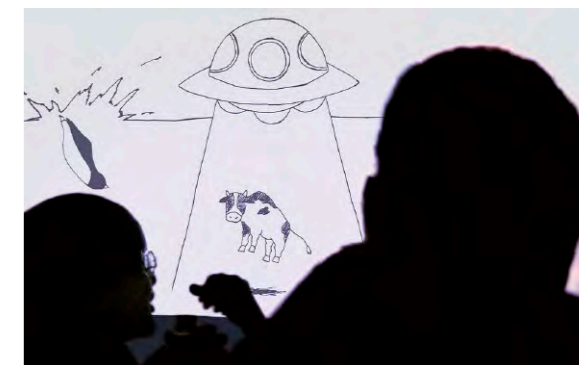
好きなものに 日々触れる、考える

映像表現に不可欠な観察力と考察力の基礎を、日常レベルで意識しながら身につけ、各自の趣向を作品づくりに盛り込みながら、一人ひとりの入試に対する向き合い方を明確にして制作していきます。



感覚テスト

シナリオハンティングの方法論を軸に、実写やアニメーションの現場で培われた講師の経験や理論を伝授します。



どう観るか どう伝えるか

映像作品を題材に解説と意見交換を行い、構造や技法、編集など多様に解釈していきます。表現を受動的に楽しむだけでなく、研究対象としても掘り下げていける批評的な視点を養います。



小論文

文系理系の異分野を往来しながら、既知の対象を未知として観察、解体、考察、再解釈する思考回路を開拓します。

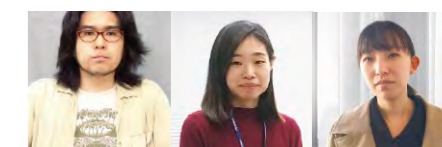
感覚テストと小論文、二つの科目が授業の中心です。全く経験がなくても、どちらか一科目だけでも基礎からしっかり学べます。次のページでは最新の高得点合格者入試再現作品を紹介しています。
*志望大学によりデッサンなどほかの科目の選択を検討される場合は、現時点での描画力などレベルを確認して適切な選択肢も提案したうえで対策を行います。申込手続前に面談、あるいは入塾後に各科目の課題を試すこともできます。

主要対策学科

武蔵野美術大学 映像
東京造形大学 映画・映像、アニメーション、写真
日本大学 芸術学部 映画(演技コースを除く)、写真

指導スタッフ 講師一覧 P.80

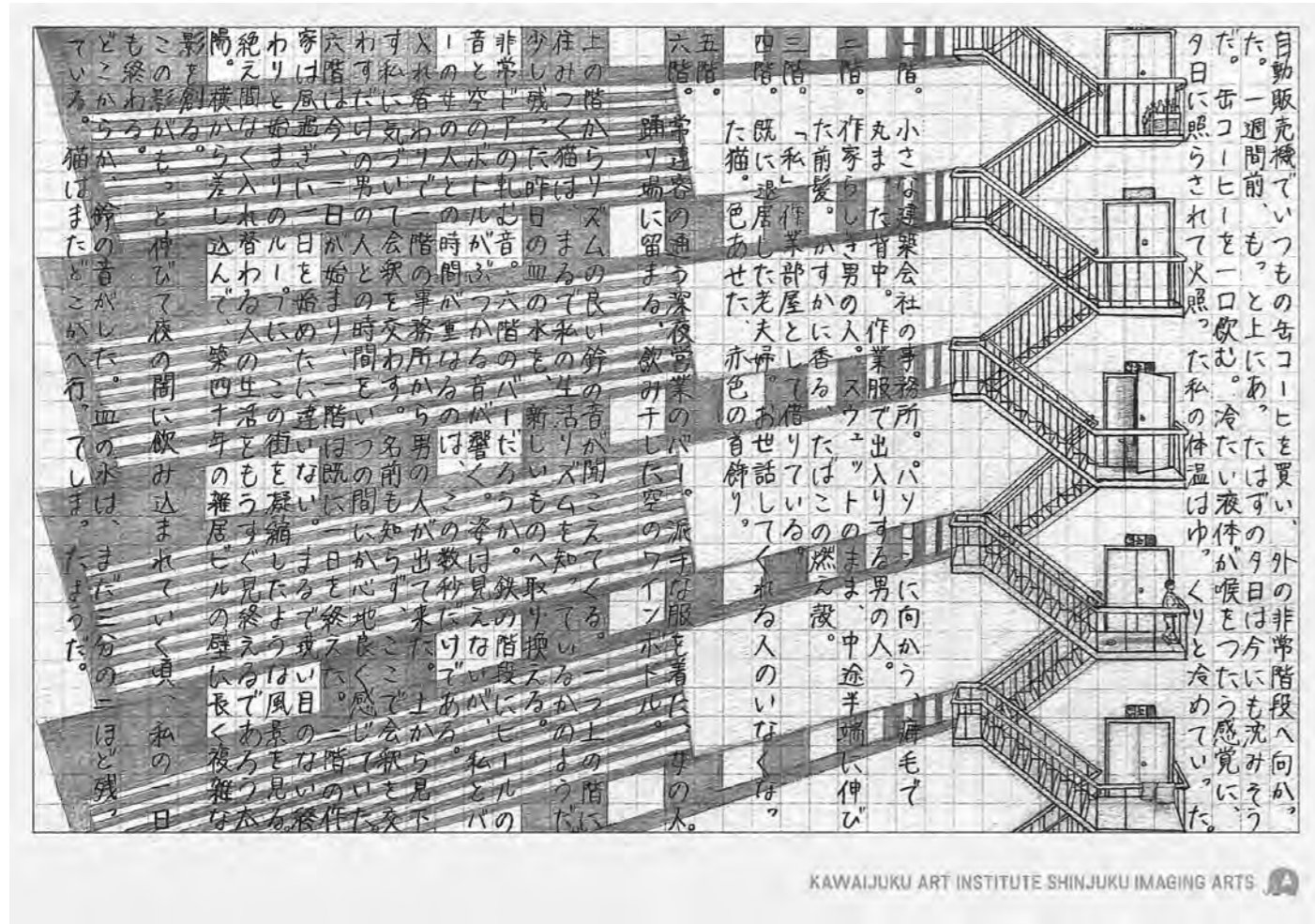
古屋広之 / 小池美稀 / 湯徳遥



※各大学総合型選抜を検討される場合は、作品や活動履歴を確認して適切な受験形式も提案したうえで対策を行います。申込手続前に面談、あるいは入塾後に各形式の課題を試すこともできます。

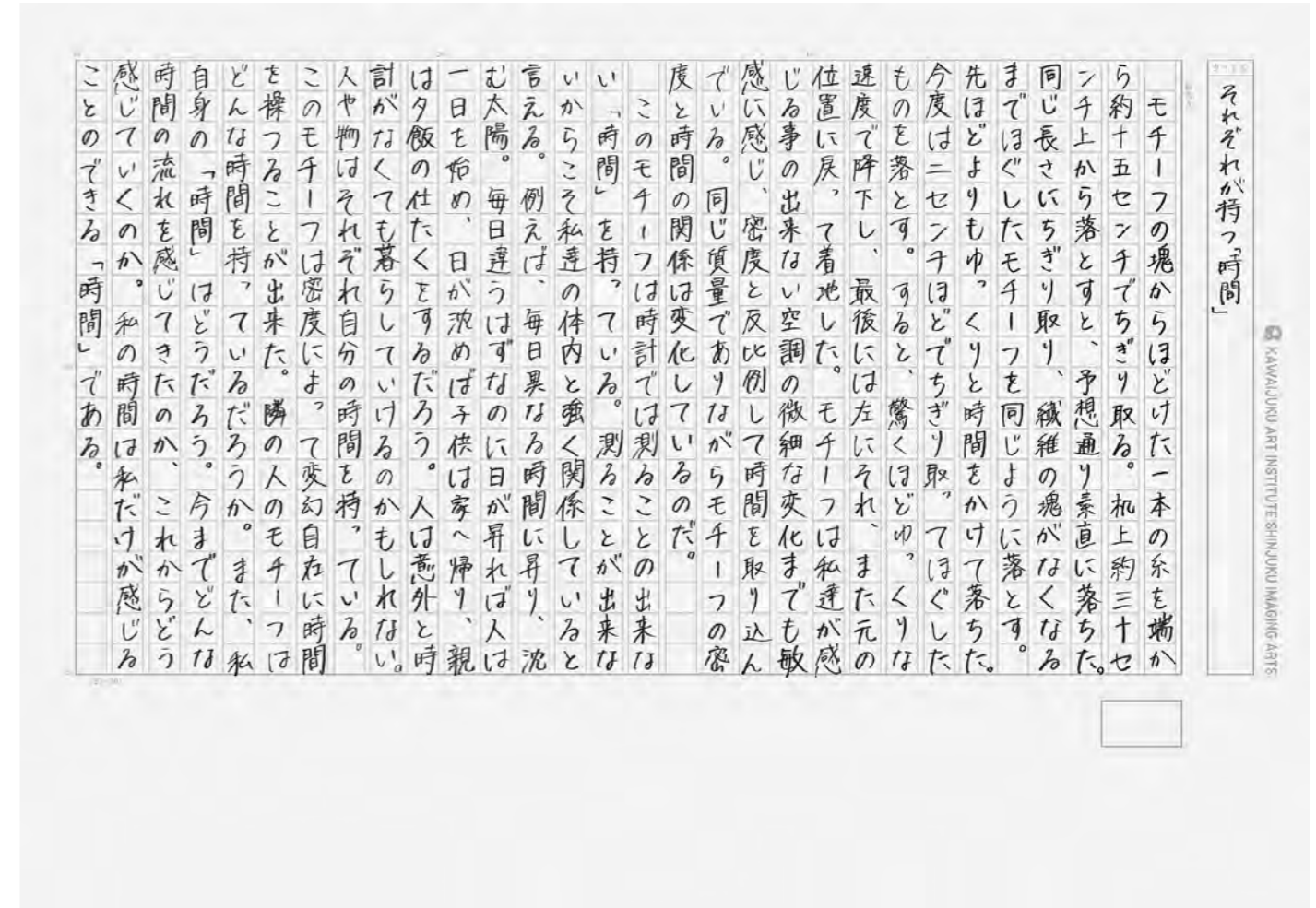
CURRICULUM

1 学期	夏期講習	2 学期	冬期講習	3 学期・直前講習
過去問題を分析して、求められる基本を理解します。ミニマルな構造や技法のアニメーション作品を制作します(予定)。	基礎的な課題を通して、幅広い考え方や作り方に触れ、各自の趣向に合った表現を模索します。	実践的な課題を通して、各自の方向性を掘り下げ、作品精度を向上させます。	本番を想定した課題を通して、これまでの自作を応用、展開、リメイク。作風を確立します。	試験当日に向け、自らの表現を完成させます。 3 学期は1月中旬で終了します。



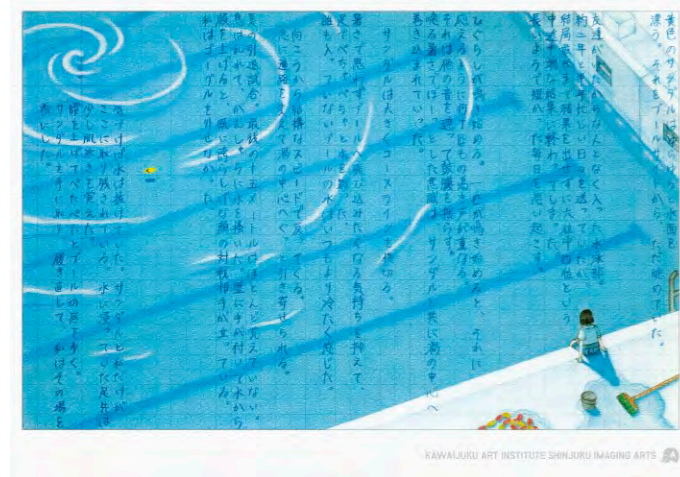
KAWAJUKU ART INSTITUTE SHINJUKU IMAGING ARTS

a



KAWAJUKU ART INSTITUTE SHINJUKU IMAGING ARTS

d



KAWAJUKU ART INSTITUTE SHINJUKU IMAGING ARTS

b



KAWAJUKU ART INSTITUTE SHINJUKU IMAGING ARTS

c

感覚テスト a 下記の言葉から想起する異なる時間や空間を結ぶイメージを絵と文章で表現しなさい。 | 武蔵野美術大学 入試再現
「水」

b 一秒間を自由に想定して、その束の間の時間から想起する場所のイメージ、あるいは出来事のイメージを絵と文章で表現しなさい。 | 2学期

c 下記の言葉から想起する場所のイメージ、あるいは出来事のイメージを絵と文章で表現しなさい。 | 直前講習
痕跡を残す

小論文 d 配付された毛糸玉のラベルを外し、自由に観察しなさい。観察からテーマを導き出して、自由に論じなさい。 | 武蔵野美術大学 入試再現
※この作品は武蔵野美術大学ウェブサイト『入学試験問題集 2024』デジタルパンフレットに掲載されました。

これらの作品が生まれた背景——学生の証言

映像のことなど何もわからずに通い始めたのが高校三年生の春期講習。はじめの頃は感覚テストも小論文も一作完成させるのに一苦労でした。

コツを掴みはじめたのは秋頃。感覚テストと小論文どちらにも言えるのが、とにかく“対象を観察して独自の視点を見出すこと”でした。そのために普段なんとなく見ているものの背景を考えたり、気になる写真を集めて自分が好きな構図や雰囲気を知ったり。授業で観る映画のワンシーンを、純粋に“映像”として受けとる視点を意識してみたり。

河合塾美術研究所のいいところは、しっかり時間をかけて何度も先生と話し合いを重ねて一つの作品を完成させるところだと思います。実際入試で制作した作品(a)も、はじめはなんとなく格好良かった一枚の写真から、数えきれないほどの話し合いを重ねて生まれたものです。非常階段の影が伸びて薄まり、その繰り返しで絶え間なく続く人々の日常を表しています。雑居ビルの住人たちにはなんの接点もなく、年も性別も職業もバラバラです。誰かの一日のはじまりは誰かの一日の終わりであり、太陽の動きに関係なく人々は自分の時間を生きています。

はじめは文章が展開できず苦労しましたが、先生と幾度も話し合いを重ねて、最後はじっくり内容になっていきました。自分にはない発想的確にアドバイスをくれるので、毎回ワクワクしながら対話して、それをどんどん画面に落としこむのがとても楽しくなっています。“共同作者”として作っていることがとてもよかったのだと思います。制作以外の相談にもしっかり時間をかけてくれるので、どうすればよいか分らずに悩むということはありませんでした。

冬頃からは完成したネタをリメイクしてさらに追求していきます。この作品(a)も描く部分によって鉛筆の濃さを変えて、文章も改行位置などの細部にもこだわり、手に染みつくまで描いたおかげで、試験当日も焦ることなくいつも通りに完成できました。先生が言っていた「今までやってきたことを出すだけ、受験当日に特別頑張ることはない」という言葉通り、河合塾で過ごした時間は受験当日の自信に繋がりました。

先生が教えてくれた映像を観る視点は、大学に入った今でも大きな糧となっています。何もわからないで入塾した私が、ここまで映像を楽しく学ぶことができた河合塾美術研究所にはとても感謝しています。

この学生はなぜ合格したのか——講師の視点

雑居ビルの壁に伸びる非常階段の影に惹かれたことから、作品aの構想ははじまりました。異なる階の住人の異なる速度の日常は夕刻の僅かな時間を共有しながら、皿一杯の「水」でゆるやかにつながる一匹の猫を介して近隣事情を考察する時間差の群像劇に至ります。日時計を思わせる影の動きを今日の終わりを告げる暗転装置に見立てて、映像表現としての見せ場に仕上げる画面設計も抜かりがありません。その一部始終を裏窓から覗き見るような背徳感と高揚感が高評価の決め手となったのです。

近藤 蒼衣さん 現役合格
武蔵野美術大学 映像学科
東京・都立府中高校

